

## ベルナール・ビュフェ美術館

## 「わたしたちの東海道 富士山のある風景の魅力」展開催

ベルナール・ビュフェ美術館のある静岡県長泉町は東海道の沿線にあり、富士山も一望できるのが特色の場所です。「わたしたちの東海道 富士山のある風景の魅力」展は、まさにこの場所にふさわしい、東海道と富士山、そしてこの場所から生まれた作品を展示する展覧会です。

東海道といっただけで一番に浮かぶのは歌川広重の「東海道五拾三次」です。江戸時代末期に刊行された十返舎一九の『東海道中膝栗毛』などの影響で一大旅行ブームが訪れ、幕府が置いた宿場は各地の風物を楽しめる旅の宿駅として脚光を浴びることになったのです。広重はその土地それぞれの特徴や旅情を、53の宿場町と日本橋と京都を入れた55の風景を浮世絵として描きました。

そこから130年後の昭和の東海道を描いたのは、板画家の棟方志功です。棟方は駿河銀行（現スルガ銀行）の依頼を受け、「東海道棟方板画」として大阪にまで広がった東海道を描きました。昭和の高度経済成長期を経て、ビルが立ち並び飛行機が飛ぶ、広重以降の時の流れを感じられる東海道を描きました。

広重と志功が描いた東海道で、共通して中心的な存在となっているのが富士山です。富士山は言わずと知れた日本一の山であり、日本人の心のよりどころとして昔も今も強い存在感で東海道を見下ろしています。そんな富士山を主題とした作品は過去にもたくさん存在し、今でも生まれ続けています。富士山は離れたところから見た稜線を描いたり、写真におさめるのが一般的ですが、野口里佳の《フジヤマ》は富士山に登ってその地表から撮影した作品となっています。植物も無く荒涼とした高山帯は、どこか非現実的な空間を

撮影したかのようなようです。また、フランス人具象画家のアンドレ・コタボは、富士山を上空からヘリコプターで俯瞰したことを元に大画面に油絵具を厚く盛り上げて立体的に塗り、まるで絵具で彫刻するかのように富士山を描きました。富士のボリュームと荒々しさが表現された作品となっています。

美術館のある周辺の魅力に着目して作品を制作したのは、山口晃です。山口は三島市や長泉町の自分が気になったスポットを、大和絵のような画面の中に過去と現在の人物を共存させて描き、いつの時代を描いたのか錯覚が起こる作品となっています。

東海道や富士山をテーマに、その二つの出会う場所にあるベルナール・ビュフェ美術館で開催中の展覧会。絵画や写真、彫刻など、古今の14名の作家による作品は、幅広い地域や世代の方々のさまざまな風景を思い起こさせてくれるはずです。この展覧会が、皆様それぞれの東海道や富士山のある風景の魅力、ひいてはそれぞれの“原風景”を見つけるきっかけとなるのではないのでしょうか。



歌川広重「東海道五拾三次之内 由井 薩権嶺」



棟方志功「東海道棟方板画 由比 海工事の柵」

所在地 〒411-0931 静岡県長泉町東野クレマチスの丘515-57  
TEL 055-986-1300

休館日 毎週水・木曜日（祝日は開館し、金曜を休館）、年末年始

H P <https://www.clematis-no-oka.co.jp/buffet-museum/>